柿生文化

柿生郷土史料館　情報・研究誌
住所：川崎市麻生区上麻生 6-40-1
柿生中学校内
電話：070-1503-6401/044-988-0004
https://kakio-kyoudo.jpn.org/
第 206 号

新館長挨拶

地域の拠り所と交流の場を目指して

柿生郷土史料館 館長　柿生中学校 校長
慶野 久美子

柿生郷土史料館のある柿生中学校には、桜の木が 20 本以上あります。今年は 3 月末に咲き始めましたが、その後の寒さのお陰で入学式もその可憐な姿を楽しむことができました。また、生徒が過ごす教室からの桜も見事で、本当に柿生の地は自然豊かで美しい土地だなぁと、改めて気付かされました。

4 月より、柿生郷土史料館の館長となりました慶野久美子と申します。昨年度、柿生郷土史料館のある柿生中学校に教頭として着任し、1 年間を過ごしてまいりました。それまで柿生中学校を何度か訪問する機会がありましたが、郷土史料館には、昨年の着任後に初めて訪れました。

目を見張ったのは、展示されている史料が豊富なこと。史料館の支援委員をされている方の蔵にあったという古文書や生活用具などがあるかと思えば、教科書の写真でしか見たことがない物の精巧な複製、本物の鉄砲や、近くの鶴見川で採れた砂鉄など、じっくりと見てみたくなるものがたくさん展示されていました。また、江戸時代の小学校の教科書などもあって自由に手に取ることができるのですが、内容もさることながら、教科書を手にした時の紙の感触や文字の字体などに歴史を感じながらも、人々の営みは今も昔も大きく変わっていないものがあることに気づき、不思議な感覚を覚えました。

私は物心ついたころから麻生区（当時はまだ多摩区でした）で育ちましたので、柿生郷土史料館の〝郷土〟というのは、自分の郷土のことでもあると感じております。私が麻生区に転入してから間もなくの小学校低学年の頃のこと。近所で土器のかけらを拾ってきた友達がいて、自分も拾ってみたいと思って場所を聞いてみたのですが「内緒だから教えられない」と言われ、悔しくて自分であちこち探しに行ったことがありました。その時は土器を見つけることができませんでしたが、郷土史料館には憧れの土器のかけらもたくさんあり、当時の思い出と、改めて土器を手にできたワクワク感を味わうことができました。

その後社会科の教員とはなったものの、大学での研究が歴史ではなかったこともあり、若い頃は歴史を研究するような機会はほとんどありませんでした。しかし人生も後半となり、自分の人生を考えるうえでも、仕事のことを考えるうえでも、物事を本質的に捉える必要があると感じた時、歴史を振り返ることの大切さと、歴史に学ぶことの意義を少しずつ分かってきたような気がしております。ですから柿生中学校の生徒たちには、学校の中に郷土史料館があるという恵まれた学習環境の中で、物事について深く考えたり、大切な判断や選択をするときには、歴史に学ぶという方法を思い出してほしいと思っております。

柿生中学校では例年、学校の中に郷土史料館があるというメリットを生かして、文化祭の見学場所の一つとして郷土史料館を開館し、多くの生徒や保護者が史料館を訪れています。また今年度は、4 月の授業参観の時に史料館を開館しましたが、この時も、支援委員さんの解説に耳を傾け熱心に見学される保護者や生徒の皆さんの姿がありました。

柿生郷土史料館の魅力は展示の内容ばかりではありません。史料館の運営に携わる支援委員の方々のお人柄や生き方も魅力的です。歴史や郷土史に造詣が深く、現在もライフワークとして研究を続けながら史料館の運営やセミナーでご活躍の方々もいらっしゃれば、柿生地区をふるさととし、柿生中学校の卒業生や柿生中 PTA 活動での縁をきっかけに、誘われて支援委員になられた方々など様々ですが、どの方も、柿生地区に根差して地域のために役割を果たすことに前向きな方々です。支援委員の方々との会話は温かく和やかな雰囲気で、多くの知識や充実した趣味のお話なども伺うことができ、いつも心が満たされます。私自身、人生の先輩の話を聞ける絶好の機会と思い学ばせていただいておりますが、中学生にも地域の大先輩の背中をお手本にしてほしいと思っております。

これからも、柿生郷土史料館が地域の大切な遺産を後世に繋げていく場であるとともに、地域の皆さんの拠り所と交流の場となれるよう、微力ながら役割を果たしたいと存じます。引き続き、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

（前月号において編集部の手違いで校長の原稿の後半部分を落としてしまったため、改めて全文を掲載しました）

古老は語る
宮野薫さんのお話 11

岡上の女性：戦前の暮らし

（聞き手、筆録、コメント＝小関 和弘(柿生郷土史料館専門委員)）

＊祖母から聞いた話。一年で一番の農繁期（作物の収穫、作付）の終わった 6 月、11 月頃に浅草に灸を据えに行くのが戦前までの女衆の唯一の楽しみだった。近くに全国的に有名な能ヶ谷の「お灸点（きゅうと）」があったがそこには行かなかった。昔は女の人は滅多に外に出られなかった。子供をおぶって疱瘡を植え（種痘）に出るとかいう時ぐらいで。だから嫁いで行っても周りやよそのことが分からないのが普通だった。近所の、それこそ「組合」ウチくらいで、外の人とあんまり顔を合わさなかった。

正月の 15、16 日っていうと女正月だったけれど、そこの家から出た（他家に嫁いだ）人が来るから、なかなか出掛けられない。14 日がセエノカミで 15、16 が女の遊び日だった。

祖母は「能ヶ谷の灸は中気引き出しの灸だ」から行かないって言っていた。子供の頃、年に 7 月の 1 日と 15 日だったと思うが 2 回あって、店屋（屋台）なんかも出て賑やかで見に行ったこともある。大きな広間で背中を裸にして、モグサに火を点けるのは小学生の子供がやったってね。友達の B・S さんからそんな話を聞いた。手当が 50 銭だなんて、すごく良かったよと言っていた。

「神蔵中風灸治所」（『鶴川村誌』（1958 年）より）

お灸点もやめちゃって、今は町田市のものになったね。神蔵一族が持っていた場所で、跡取りとして二人男の子がいて、上の人は亡くなっちゃった。俳句を作っていて、神蔵器（うつわ）（本名：政彰。2001 年俳人協会賞受賞）っていうのは、相原の農学校で私と同級だった。歳はちょっと上だったけど。

・灸のための遠出が昔の村の女性の唯一の楽しみだったというお話は、かつての農村の女性の厳しい境涯を伝えていると言えよう。近所の灸処に地元農家の女性たちが行けなかった理由は、薫さんが語った昔の家での女性の立場から容易に推測できる。農村で女性は田畑などの農事労働以外に子育てを含む家事労働を担わされていた。「女正月（小正月）」はほぼ全国共通で、「女の家」といった別称で異なる時期（主に 5 月 4 日）にも女だけの休み日が設けられていた。川崎市教委『岡上の民俗』(1981～82 年調査) は 4 つの地区に女だけが参加する念仏講があったと記し、谷戸地区と川井田地区には蚕日待（かいこびまち）があって「正月 14 日のサイトヤキのあと」に女たちによって催されていたとしている。

・鶴川～浅草は、現在は電車で約 1 時間。しかし大正期には小田急線がなかったから、この「女衆の唯一の楽しみ」は小田急の開通（1927（昭和 2）年 4 月）がもたらした新しい生活スタイルの一つだったのかも知れない。

・岡上の年配の方に「お灸」のことを伺うと必ず「香山園（かごやまえん）」の「お灸処（きゅうと）」(お灸点) の名が出てくる。帝国鍼灸医報社編『全国名灸秘伝集』(1938 年) には、薫さんがお祖母さんの言葉として「中気引き出しの灸」と伝えるとおり「能ヶ谷灸」の名で「中気予防一点灸」との記載がある。「東京府南多摩郡鶴川村字能ヶ谷　三代目神林（ママ）重司」とあり、「初代が九州西國遍歴中に悟りしとか。元は舊六月一日限りの由なるが、近來は新舊の六月一日の二日間行ひ小田原急行鐵道の鶴川驛はこの灸のために出來たと云ふ。治療代は普通二圓、特別治療は三圓の由。只の二日間の収入は六萬圓以上と云ふ」と盛況ぶりを紹介している（「神林」は「神蔵」の誤植）。鶴川村役場『鶴川村誌』(1958 年) は「明治以降益々盛大となり、灸に訪れる人は、北は北海道から南は九州に至るまで広範囲にわたっている。古くは旧暦六月一日のみ行なっていたが現在では毎月一日に行なっている」と誌す。1930 年代には 2 円で米が約 10kg 買えた。「今は町田市のものになった」と薫さんが語るとおり、2025 年 1 月 25 日からは町田市の管理する都市公園となった。

・『全国名灸秘伝集』は東京市浅草区雷門二丁目二番地の「日の丸灸本部」を「面疔（めんちょう）の名灸」として挙げるが、ここが女衆の出かけた場所かどうかは分からない。　（終わり）

＊【訂正】204 号で「川路」のママを「本田さん」と記したが、正しくは「本多さん」(薫さんが電話で誤りをご指摘下さった)。

シリーズ
禅寺丸柿の歴史 16

近代における川崎市域及び横浜市北部地域での果樹栽培(16)

相澤雅雄(都筑・橘樹研究会会員)

禅寺丸柿をとりあげた果樹園芸本を探す(４)

今回は、『甘柿禪寺丸栽培法』の上梓(じょうし)に係った五十川民蔵(いかがわたみぞう)と著者の廣田鉄五郎(ひろたてつごろう)の両名についてふれてみる。五十川民蔵については、同書の巻頭に廣田鉄五郎が記した自序の中に「尚前都筑郡視学五十川民蔵氏、同郡農会技手野本謙一氏の両君よりも少なからず助力を得たり。茲に併せ記して両君の厚誼を謝す」とでてくる。五十川民蔵は、元治(げんじ)元年(1864) 8 月 14 日に大分県南海部郡(みなみあまべぐん)切畑村(きりはたむら)(大分県佐伯市)で出生された。明治 15 年(1882) 4 月に南海中学校を卒業し、同年同月に同郡床木小学校の訓導に就いた。同 22 年 3 月に愛媛県喜多郡長浜小学校長として異動した。同 29 年 5 月には神奈川県より本科正教員の免状を受け、同年同月に都筑郡中里村大場(横浜市青葉区大場町)の薬王寺に設立された明倫小学校訓導を経て、同 32 年(1899) 5 月に同郡の村立高等中里小学校長となった(『中里郷土史』)。同 36 年に刊行された『都筑郡教育會報　第壹號』(都筑郡教育会、同 36 年 10 月発行)の発行代表者となっている。同年には都筑郡訓導に任命された。

五十川民蔵(『有終の友』第 12 号より転載)

高等中里小学校長時代には、村内の農村青年の相互の交誼を厚くして、共同一致の精神を養うことを目的として設立された有終会の創設者となった。この会は高等中里小学校の卒業生を対象として、会員 200 名を抱える大規模な組織であった。会を設立してから 12 年目の明治 42 年(1909) 8 月 1 日には、雑誌『有終之友』第 1 号(有終会雑誌部)を発行した。『有終之友』は、会の目的達成のための一環として発行された雑誌で、主張、論文、短文、和歌、俳句、雑報などが収められている。五十川民蔵は、都筑郡教育会代表、都筑郡教育会幹事などを歴任され、都筑郡内の教育の普及改良に尽力された後は、津久井郡視学を経て、横浜市立第三吉田小学校長などを歴任された。大正 5 年(1916)～同 15 年までは、現在の神奈川学園(横浜市神奈川区猿渡)で書道を教授していた。多趣味の人で、中でも書道は草書にたけていたという。号を蟠谿(ばんけい)と称した。「先生から叱られても小柄で丸いお顔で親しみがありました」とは、教え子が五十川民蔵先生の思い出話として『人間教育-神奈川学園八十年の歩み』の中で語られている。情が深く誠実な人であったのだろう。

廣田鉄五郎は、明治 20 年(1887) 4 月 10 日に都筑郡下谷本村に生まれた。同 39 年 3 月に中郡立農業学校(平塚市)を卒業した。学校卒業後には、専売局盛岡煙草製造所に入ったが、2 か月後に宮内省下総御料牧場に移った。同 41 年 9 月 1 日に宮城県北部にあった陸軍省軍馬補充部鍛冶屋沢支部で陸軍技手として勤務した。同支部で勤務中に現場から事務所に帰るために乗ったトロッコが、途中で突然脱線し、投げ飛ばされてしまい、下半身不随となる大怪我を負ってしまった。翌年帰郷し、自らは一管のペンに託すことを決意し、文筆活動に入っていった。不遇な事故にもめげず、決して後悔や愚痴を言わない不屈な精神の持ち主であったという。著作活動は、中里村の上市ケ尾の「花崖山房」で行われた。現在確認している中では、19 歳の時に雑誌『農事雑報』第 90 号(1905 年)に発表した短文「農村小観」を初出とし、以後、『有利なる竹林経営法』『実験飼料作物栽培法』などの農業書、『コンコルダンス』などキリスト教関係の翻訳本、雑誌『園芸の友』『有終の友』『少年界』『少女界』『少年倶楽部』『中学世界』などに数々の作品を発表していった。このためペンネームは、花崖の他に、都筑寒村、都筑中里、中里八雲、鶴川芙蓉(ふよう)、武蔵野学人、城西学人などを使い分けていた。大正 14 年(1925)刊行の随筆『田園』(花崖山房出版部)は、当時の文部省認定書となり、小学校での副読本として使われた。昭和 25 年(1950)没。享年 64。『甘柿禪寺丸栽培法』が誕生した背景には、本間啓太郎、谷本眞司、五十川民蔵、野本謙一、廣田花崖といった学識者たちに恵まれていたことを指摘しておきたい。

（続く）

『文久二・三年王禅寺村御用留記帳』を読む　―２―

飛田三枝子（柿生郷土史料館専門委員）

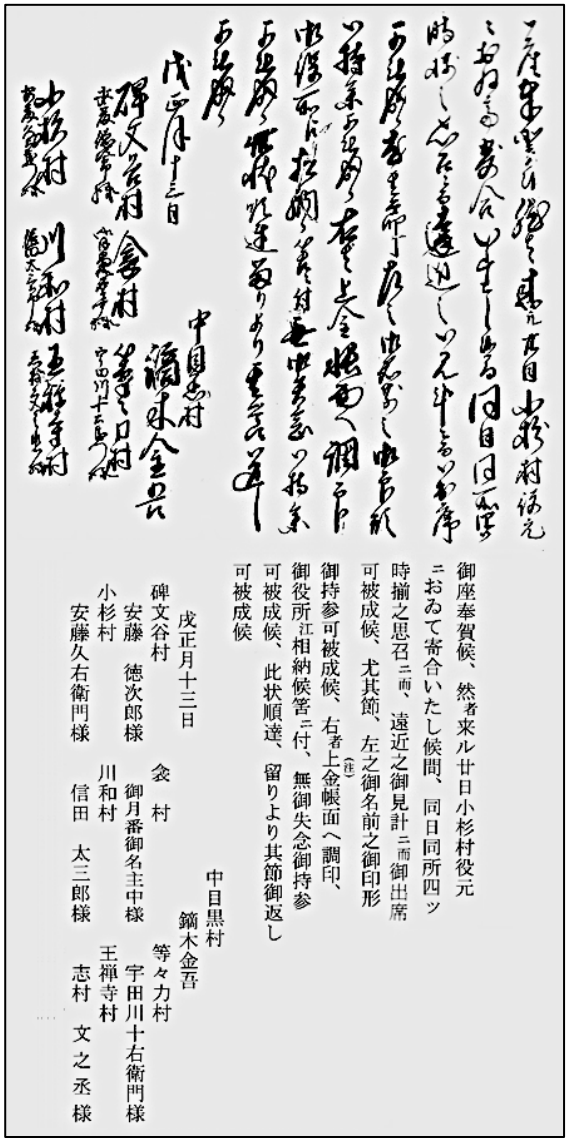
『御用留記帳』の最初の記事は文久２年(1862)正月 13 日に中目黒村名主鏑木金吾が出した新年初寄合の案内状です。中目黒村は増上寺御霊屋料の村々に廻状をだす触頭の役についていた。御霊屋料（領）とは御霊屋（将軍の霊廟。増上寺は徳川家の菩提寺）を維持するために幕府が増上寺へ寄進した領地の村々のことで、幕末には 25 ヶ村が寄場組合を結成しており、王禅寺村や隣りの石川村も含まれる。（まえがきと資料４参照）

廻状を途中から読むと、「…しかれば来たる二十日小杉村役元において寄合いたしそうろうあいだ、同日同所四ッ時（午前 10 時ごろ）揃いのおぼしめしにて」小杉村より遠いか近いか各自「御見計らいにて御出席なさるべく候…」とある。

また別の資料として、文政 13 年（1830）の書上（川崎市史・資料 313）には「小杉村は…村々より最寄りよろしき村方につき二十五ヶ村寄合場と」定め、「毎年正月二十日定例村々打ち寄り、取締方その他万事相談いたし・・」と書いてある。初寄合は御霊屋料の村々の定例行事だった。寄合場となった小杉村名主安藤久右衛門の屋敷は広大で、今も長屋門（市重要歴史記念物）が残っている。

さらに文久 3 年の初寄合の記事は、寄合への案内状は写されていないが、47 頁の後から５行にわたって書いてある。併せてみると、寄合では増上寺地方役所（御霊屋料の村方を支配している役所。資料１参照）への上納金が集められ、正月らしく年玉や茶、半紙、末広（扇子）が配られた。寄合への出席は村役人の勤めだから会料 232 文は村入用という公費から払われていると思われる。また集会での出来事として、「432 文　3 品代立て替え分　貸し」というメモも御用留に書きつけている。

廻状の結びの文「この状順達、留り（最後に受け取った村）よりその節御返しなさるべく候」は決まり文句で、廻状は差出人に戻された。宛先は「御同役衆中」とあるように、金吾と同役である各村の名主の名前が書かれている。衾村は当時名主が毎月交代だったようだ。この廻状では宛先が 10 ヶ村なので他の村々への別のものがあると思われる。


御座奉賀候、然者来ル廿日小杉村役元
ニおゐて寄合いたし候間、同日同所四ッ
時揃之思召ニ而、遠近之御見計ニ而御出席
可被成候、尤其節、左之御名前之御印形
御持参可被成候、右者上金帳面へ調印、
御役所江相納候筈ニ付、無御失念御持参
可被成候、此状順達、留りより其節御返し
可被成候
戌正月十三日　中目黒村　鏑木金吾
碑文谷村　衾村　等々力村
安藤　徳次郎様　御月番御名主中様　宇田川十右衛門様
小杉村　川和村　王禅寺村
安藤久右衛門様　信田　太三郎様　志村　文之丞様

『御用留記帳』　部分

文久 2、3 年、王禅寺村からは当時 60 才を過ぎていた文之丞に代わって「この出勤百助つかまつり候」とあるように文之丞の末弟百助が出席している。初寄合の記事は「百助仕候」までで、次は拝借鉄炮の話です。

（『文久二年・三年王禅寺村御用留記帳』は当史料館で販売中。千円）

第 23 回 特別企画展

柿生中学校考古学研究部の横穴古墳・寺院や城址の研究紹介

柿生中学校の考古学研究部は、1977(昭和 52)年に麻生台団地の横穴古墳を見つけたことを契機に誕生しました。中学生が麻生台団地横穴古墳群の発見に寄与したことが伝わり、意気軒高とした部員たちは、通学区内を調べ廻り、下麻生、早野、王禅寺、真福寺の横穴古墳を発見、1981（昭和 56）年の連合文化祭において、研究成果を「古墳時代の柿生～柿生の横穴古墳の特色」として発表、高い評価を得ました。84 年３月をもって、横穴古墳研究に区切りを付けた後は、王禅寺伝説班、麻生不動尊研究班、亀井城研究班の３班を編成、古代、中世史の研究に歩みを進め、研究成果を部誌『あしあと』（1 号～4 号まで発行）にまとめ、89（平成元）年度をもって活動を閉じました。30 期生から 42 期生まで 13 年間の活動でした。彼ら、彼女らの活動の成果の一部を紹介します。

柿生郷土史料館 開館日のご案内 【参加自由、入場無料】

◎開館日　：７月１３・２０・２７日（日曜日）　　８月２・９・１６・２３日（土曜日）
◎開館時間：午前１０時～午後３時